

京都大学	博士（文学）	氏名	五十嵐涼介
論文題目	カントの論理学体系とその哲学的帰結		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>西洋近世哲学を代表する哲学者であるカントはまた、「一般論理学」と「超越論的論理学」という二つの論理学を構築するという論理学的貢献をも行なったと自負していた。しかし、認識論や倫理学等の他の哲学の分野と異なり、これらのカントの論理学を論理的プロパーの業績として評価する声は、ほとんど聞かれなかった。</p> <p>このような状況は近年変わりつつはあるが、それでも、カントの論理学を、その原型に忠実な仕方で、現代的水準から見ても意味あるものとして再構築した上で、その論理学的・哲学的意義を包括的に明らかにする研究は、これまで国内外を見渡しても皆無であった。</p> <p>その中において、本論は、「判断」を基本的ユニットとする近世論理学を、現代論理学のボキャブラリーを用いて忠実に再現できる小山田圭一の cod 構造を用いて、カントの「一般論理学」と「超越論的論理学」を現代的に再構成した上で、それらと（レンツェンによって形式化された）ライプニッツ論理学を比較することで、これら三者の関係を解明することに成功した。具体的には、「一般論理学」を「判断」についての形式的体系と捉えた上で、ライプニッツ論理と超越論的論理学を、その「判断」に対して、それぞれ（現代の論理的意味論で言う）「実在論的な意味」と「検証主義的な意味」という異なった「意味」を与える、二つの論理的意味論として位置づける解釈が提案されたのである。これは世界のカント研究においても画期的な成果であると評せる。</p> <p>本論の議論は以下のように進められる。</p> <p>第一章では、カント論理学に関する研究の現状が概観され、ライプニッツ論理学をも視野に入れつつ、カントの二つの論理学、即ち「一般論理学」と「超越論的論理学」の予備的な特徴付けが行なわれる。</p> <p>第二章では、カントの論理体系の形式的な側面に着目し、cod 構造を用いて、「一般論理学」に対応する、「判断」一般のモデルが定式化される。</p> <p>第三章では、第二章において定式化された形式的モデルを用いて、「超越論的論理学」が「検証主義的論理的意味論」として再解釈される。</p> <p>第四章および第五章は、カントの「単称判断」および「無限判断」について検討し、その解釈上の問題を見極めた上で、本論独自の新解釈が示される。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

西洋近世哲学を代表する哲学者の一人であるカントは、認識論・倫理学・形而上学・美学・法学・政治学といった分野において、今日でもなお多大な影響力を保持している。一方、「超越論的論理学」と(彼なりの)「一般論理学」という二種類の論理学をも樹立したと自負するカントであるが、これらは、プロパーな意味での論理学上の業績とは、これまで見なされてこなかった。彼の言う「一般論理学」はヴォルフ流の論理学の恣意的でアドホックな改訂版としてしか扱われてこなかったし、「超越論的論理学」は「論理学」の名を借りた認識論であると解釈されてきたのである。

ただ今世紀に入り、このような状況にも変化の兆しが見え始めた。カントが長年行っていた論理学講義の種々の講義ノートが相次いで出版されたこともあり、カントの哲学における論理学の重要性を改めて再評価する研究や、カントの論理学を現代論理学のタームを用いて再定式化する試みもなされるようになってきたのである。

ただこれらの研究は、カントの二つの論理学を包括的に扱う視点を欠いており、また現代的な再定式化も、カント当時の論理学とは大きく異なった現代の構文論的・意味論的枠組みの下でなされたものであり、結果として、カント論理学の姿を少なからず歪めるものになってしまっていた。

このような状況を踏まえ、本論は、小山田圭一が開発した論理システムである cod-構造を援用することで、カントの二つの論理学の忠実な形式化を試み、レンツェンによるライプニッツの論理学の形式的再構成をも参照することで、一般論理学を「判断」を基本的なユニットとする形式的な論理体系として捉え直し、ライプニッツ論理と超越論的論理学を、その「判断」に対して、それぞれ(現代の論理的意味論で言う)「実在論的な意味」と「検証主義的な意味」という異なった「意味」を与える、二つの論理的意味論として位置づける解釈を提案した。

このことによって、カントの二つの論理学の間関係が明らかになったのみならず、それらとライプニッツ論理の関係づけも果たされたことで、カントの論理学的企ての核心が、「実在論的な」ライプニッツ的意味論に対抗して、「検証主義的な」意味論を与えることにあったことが明確にされた。

もちろん、カントの論理学を「論理的意味論」として読解する試みはストローソン以来、一つの解釈の流れとして存在するし、またその意味論と現代の検証主義との類似性を指摘する先行研究も少なくない。しかし、本論が、カントの二つの論理学に対する包括的で説得的な形式化を施した上で、カントの論理学が全体として「検証主義的」な営みであったことを改めて示したことの意義は極めて大きい。本論は世界のカント研究史上、一つの画期をなす研究であるとすら言うるのである。

さらに本論は、上記のようなカント論理学の再構成を踏まえ、「単称判断」や「無限判断」を巡るカントの言説に対する解釈上の難問に対しても、従来の諸解釈を踏まえた上で、快刀乱麻を断つが如き新解釈を与えている。本論が行なったカント論理学に対する包括的な再構成から自然に導かれることで、これらの新解釈も説得的なもの

たりえているのである。

だが本論に問題がないわけではない。まず本論は、本論が採用したレンツェンによるライプニッツ論理の再構成が、ライプニッツ解釈として妥当かどうかに関する突っ込んだ検討を欠いている。レンツェンはライプニッツ論理に関する有力な研究者であるが、その再構成に関してライプニッツ研究者の間で異論がないわけではないのである。また本論のカント論理学の再構成によって、(テキストによって「ゆれ」すらある)カントの論理学的主張の全て(例えば、カントによる「無」概念の規定)を覆えるかどうかという点にも疑問の余地が残る。

だが、これらの問題点は、今後の研究の進展によって克服されることが十分に期待できるものであり、本論の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2019年1月23日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。